

調査と方法

「カルロス・クライバー ある天才指揮者の伝記」

カルロス・クライバーのような芸術家の伝記をどのように、そしてなぜ書くのか。知られていることがあまりにも少なく、公衆に姿を見せるのを全く拒んだ人物である。私はこの疑問に、ここ数年間たびたびぶつかった。そのとき私はもともと、そのような計画に関わろうとは全く思わなかった。着想が芽生えたのは、私が 90 年代にカルロス・クライバーの知られていない録音を集中的に調べ、可能な限りすき間なく、彼の演奏と放送への関わりの裏付けをとろうとしたときである。また、日本人のクライバー・ファン平沢透さんが、ご自身のインターネット上で、クライバーの演奏の一覧表を補足し、訂正するお手伝いにも努めた。

この何年間かに、すでに多くの資料が私のもとに集まったおかげで、クライバーに関する伝記をあえてするという考えに賭けたのである。この指揮者は有名にもかかわらず、実際にはいかに僅かしか知られていないかに気づいたとき、この課題に取り組む衝動がなお著しく高まった。少なくともこの時点では、彼自身からそのために得るところがほとんどない、という思い違いはしなかった。多くの同業者やジャーナリストが、まさにこれを理由に、クライバーに関する伝記を書くのは不可能とみて、断念したのである。しかしそのために、クライバーに関して何か書くことを決してしてはならないのだろうか。クライバーの卓越した音楽上の意義を目の当たりにしながら、彼が次第に忘れ去られていくのを想像するのは、私には実に耐え難く思われた。

私がそれから体系的に調査を始めたとき、資料を集め、書簡を見つけ出し、文献を評価し、同時代の証人と話をするのに、どれほど多くの時間とどのような気力を、そのために投入しなければならないか、すぐに気づいたのである。これらを見つけ出すだけでも、計り知れない困難で、極度に時間がかかり、がっかりすることもしばしばあった。たとえば、長い間探した挙句、ある人物が見つからない、ずっと以前に、あるいはごく最近に亡くなったとわかった場合である。最初にいくつかインタビューした後、すでに明らかになったのだが、特に十分だと思われる選ばれた同時代の証人のみに話しかけてもほとんど意味がなく、できる限り多くの人に尋ね、すべての証言を批判的に吟味し、他の証言と調和させた後、本にしたら丸 2 巻分にもなったであろう巨大な情報の山から、本質的なものを抜粋し、適切に組み合わせる方が意味があった。調査を広げたおかげで、クライバーと親しい間柄にあることを前もって全く知らなかった人や、貴重なヒントを与えてくれた人に、思

いがけなくもばったり出会うことに成功した。クライバーのかなり謎めいた幼年時代と青年時代の調査には、父エーリヒ・クライバーとの伝説に包まれた関係と並んで、とりわけ労力を要し、ここでも不明瞭なところが明らかになり、うわべでは探究しがたく見えるものが明るみに出るまで、ほとんど絶望したことが時々あった。

私が目標とし続けたのは、できる限りまとまって生き生きとしたクライバー像を、いわゆる「オー・テーネ」(毎年オーストリアで開催される文学祭)にも関連させて現し、著者としてあまり押し付けがましくないようにし、読者に固定観念を提示しないことであった。証明できない主張は避けた。同様に私の義務として課したのは、情報を選択する際に、控えめに責任を持って、クライバーの私的な領域を取り扱うことであった。私の著書に対する多くのきわめて前向きな反響は、私にとってはこのアプローチの正しさを証明するものである。

もちろん私がうれしくありがたく思ったのは、単なる仕事仲間だけでなく、クライバーと個人的に非常に親しい人々も、情報を公開してくださり、彼についてそのように非常に深い人間的な印象を得ることができたことである。同様に私がほっとしたこと、多くの必要不可欠と思われた同時代の証人は、一部の人々はもはやご存命でなく、個人的な理由から確かに、実際には自由に、駆け引きせず、全く率直には意見を述べるのが決してなかったであろうが、そうした証人の方々の役割が、(書面による伝言と並んで)私の全てのインタビューから、批判的な洞察をもって上手く再構成されたのである。そして芸術家、音楽家、劇場の支配人その他の人々が、クライバーに関する体験をすでに書面や、ラジオやテレビのインタビューで公表していた場合でも、私にとって非常に重要だったのは、可能であればそうした人々と自ら話をするのであった。私はインタビューのほか、集中的に雑誌、新聞、文献の調査に専念し、クライバーの活動拠点に赴き、公文書館を訪ねたが、残念ながら必ずしも期待した成果は得られなかった。そんなわけで私は、閲覧可能な国家保安省の文書を閲覧する認可を得なかった。1950年代における東ベルリンでのエーリヒ・クライバーの関わり、および息子のポツダムでの関わりを目の当たりにして、そうした文書は実際に存在しているか、存在していたに違いないのだが。しかしその代わりに、他のきわめて興味深く有益な文書を閲覧したり、写しを手に入れたりすることができた。

2003年の冬、私の調査の発展段階にあつてカルロス・クライバーに問い合わせようと決意したとき、彼の妻の突然の死を知った。その後2004年の春、クライバーの知人たちから、さらに待つように勧められた。しかしクライバーの心身の健康状態に、脅かすものを暗示するものが何もなかったので、7月のクライバーの死の知らせは、他のすべての知らせと同様に私を不意に襲い、打撃であった。しかし、多くの音楽愛好家にとってすら、クライバーという名前とその意義が、場合によってはまだ概ね知られていたということは、彼の死

に対する世界的な反響によって、見過ごすことができないものとなった。それだけに今や私は、ご家族の支援がなくても、私の伝記を次の数年で一気に書き終えたかった。但し、クライバーの姉との対話で元気づけられ、スロベニアにいる彼の姪と連絡して非常に励まされはした。そのようにして、クライバー家の文庫に立ち入ることは残念ながらできなかつたが、その他の多数の必要不可欠な主要な典拠に立ち返ることができた。たとえば、エーリヒ、カルロス、ルース・クライバーの書簡である。生涯のあらゆる段階での多数の書簡が、この上なくさまざまな面から都合よく私に提供されたが、それらを評価することはきわめて貴重なことだと明らかになった。それは彼の生涯を復元するためばかりでなく、カルロスにもエーリヒ・クライバーにも個人的に迫るためにも、貴重であったのである。私が少なからず驚いたのは、カルロス・クライバーがどれほど率直に、誠実に、飾らずに、あれほど愛好した封入していない葉書においてさえ、考えを述べているかである。それを補うように出て来たのが、クライバー宛の手紙や、他の人々のクライバーに関する書簡のうち、獲得に努めたり成功したりした取り組み、あるいは全く別の出来事の周辺に関わるものである。特別な稀に見る掘り出し物だったのは、1960年のインタビューである。これは信頼できる根拠により唯一証明され、伝えられてきたが今日まで知られず、行方がわからなかつたクライバーのインタビューである。

私が著書を構想するに当たって念頭に置いていたのは、音楽に関心のあるできるだけ幅広い読者層である。それで私は、専門に特定された音楽上の議論や分析に没頭する意図はなかつた。そうした議論や分析は、むしろ特殊な専門家読者向けの学術活動の題材になってしまうからである。それにもかかわらず、私にとってきわめて本質的に重要だったのは、総譜を最初に研究することから始まって、完成された演奏に至るまでのクライバーの仕事のやり方や、彼の意図するもの、仕事および行動の仕方、解釈、流儀が非凡であることを説明することであった。私はこれをひとまとめに固有の章の形式で行うのではなく、実際に即して原稿全体にわたって散在させ、解説し、インタビューでの発言も用いて生き生きと、ありありと形作ることにした。あのように評価が分かれたクライバーの仕事のやり方や、把握し難い個性に対して、数十年間に言論界からやはり非常に興味深く多面的な反響もあつたが、新聞や雑誌からの付随する引用は、そうした反響を解明するためであった。著書の文体に関しては、できるだけよどみなくわかりやすいままにしておくつもりであつたが、エッセイ調の形式や文学的な形式と同様、不必要に複雑になるような言い回しも避けた。それに関しては、カルロス・クライバーの生涯が、人の心を引き付ける小説の題材を十分に提供するであろうことは確かである。

まさに私自身が指揮者カルロスおよびエーリヒ・クライバーと個人的に親近感があり、また私が関心を持っており、作業中に次第に彼らの生涯と混和したために、とりわけ私が努めたのは、学問的処理方法に志向した客観的な見方を保つことであつた。もちろん、多

くの出典を取り扱う場合にもそのようにした。調査から期待できる結果を、あるいは無意識にも最後に調査結果として提示することは、私には決して問題にならなかった。そういうわけで私が初めに期待したのは、予測できず、気難しく、常軌を逸し、気まぐれに振舞うクライバーについて、多くの報告を目の前にして、むしろ私自身で、結局はずっと批判的な人物像を描くことであった。私がある間調査していくうちに、一人の人間像が浮かび上がったことは、疑いなく証明できる。それはきわめて深く誠実に、音楽に対して義務感を覚え、それによって、あのようにしばしば誤解された態度が理解でき、その態度が相対化される人間である。そうした人間像が浮かび上がったということは、客観的に見れば必然であった。

アレクサンダー・ヴェルナー